



樹 蔭



昭和二十六年九月十五日 印刷
昭和二十六年九月二十日 發行

樹蔭 定價 四〇〇圓

著 者 久保田 万太郎

發行者 栗本 和夫

東京都千代田區丸ノ内二ノ二

印刷者 山元 正宜

東京都文京區柳町二六

平版印刷者 野口 嗣雄

東京都文京區水道端一ノ二四

發行所 中央公論社

東京都千代田區丸ノ内二丁目

九ノ内ビルディング五九二區

電話和田倉一一二一番

振替口座東京三四番

目次

樹蔭

一

川

一九

柴又

二三

柳の芽

二五

明治四十二年

二七

あとがき

樹 蔭

「小曾根さん……小曾根さん……」

うしろから、だしぬけに大きな聲でよばれた。おもはず五十吉はふり返つた。

こツちくゝと手を叩かないばかりの、いかにも馴々しいその聲は、五十吉がいま去りかねて、しばらくそこに立つてゐた柳の木のかげからだつた。五十吉の目はその聲のぬしをたしかめた。四十がらみの、坊主あたまの、六月だといふのにまだジャンパーを着込んだ男だつた。

誰とも、何ものともしかし、遽に五十吉に合點が行かなかつた……が、五十吉にとつては、その男の何ものだかよりも、いつ、どこから、どうしてもその男がそこにでゝ來たかのはうが、もつと合點が行かなかつた。……といふのは、いまのいまゝで……すくなくもかれがそこに立つてゐた三四分のあひだにあつて、その柳の木の蔭に、かれは猫の子一匹みつけることができなかったからである。……それほど、白晝、いかに梅雨どきのはつきりしない空の下とはいへ、うそのや

うにガランと、ひっそりと、人通りの全くたえたそのあたりだったからである……

「この間は……失禮しました、この間は……」

と、その男はしかし、五十吉のけんな顔に頓着なく、いつかその側に近づいてゐた。

「いえ……」

五十吉は、口の中で、何んとかすたゝ呟いたゝけだった。實際、それ以外、かれには返事のしやうがなかつたのである。……それにしても、さア、誰だったらう？……

「……いやだなア、忘れてしまつたんですか？」

それとみて相手は透かさずいつた。「長谷川ですよ。……長谷川常次郎ですよ、小曾根さん……」

「……………」

「ちゃんと名刺をさし上げた……あなたからもいたゝいた……」

「……………」

「この間、それ、汽車の中で……」

「あゝ、あなた……」

突然のかれの聲が相手を遮つた……途端にかれはおもひだしたのである。……さうだ、この間、

汽車の中で……

「……やツと分つた。」

と、相手は、わざと呆れたやうに、いへば顔中を口にしてわらつたのである。「いゝえね、いま、あすこんとこに立つておいでゝしたらうが？……ハテ、どツかでみたことのある方だが？……じつはこツちも、あの硝子戸ん中からみて、さうは思つたものゝすぐには分らなかつたんで。

……外へでゝみて分つたんで……」

「何んとも……何んとも、いえ……」

五十吉は、いかにも間がわるさうに帽子を脱ぎ、いんぎんにあたまを下げた。「あんまり思ひがけないもんで、つい……」

「いゝえ、こツちもわるいんで。……いきなりこんな恰好をぶつけたつて、あなた……」

その男は……すなはち長谷川常次郎は、もう一度、人をよく大きな聲でわらつたあと「それに、これがいけないんで、この髪かみが……」

と、その坊主あたまを大きな手で搔きまはしてみせた。

「あゝ、さう被仰れば……」

と、氣がついて、五十吉のさういひかけるのを、すぐにまた

「さうなんで。……この間お目にかゝつたときには、まだ、みどりの黒髪ふさ／＼としてゐたんで……」

と、引取つて、きはめて機嫌よくかれはいつた。「それがたちまち、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年は一ト昔。……夢であつた、になつてしまつたんで……」

とかく、何事にも、無駄のいひたいのがこの男のやまひだつた。

「そのせいか、大變お若く……」

五十吉は正直に顔をみていつた。

「さうなんで。……さういはれるんで、誰にも。……でも、ちツともうれしくないのは、坊主になつたらよけい目尻の下つたのがはつきりしたなんて、入らざることはいふ奴がでゝ來ましてね。

……でも、生顔いきがほと死顔と、かうも相好がかはるとは……」

「でも、それにしても……」

五十吉は、狼狽うゑたいてゝ、いひわけをするやうにいつた。……が、このいひわけは效かない、さきから聲をかけられ、それも「……忘れてしまつたんですか？」とまでいはれて、尙且思ひだせな

かつたのは、どんな理由があつたにせよ、重々こつちがわるい。……このしくじりの納まりをどうつけるか？……ひそかに五十吉は吐息をついた。

が、そんなこと、常次郎のはうにすればどうでもいゝことだつた。かれにすれば、それよりも、その坊主あたまのそも／＼の由來……こゝのところ、毎日、誰をつかまへてもしやべるその一席を五十吉にも聞かせたい氣で一ぱいだつた。そして五十吉なら、それまでの身近の聞き手のだれよりも、かならずやちやんと聞いてくれる、しんみに聞いてくれる。……嘗ての汽車の中、六七時間の附合に徴して、かたくかれは信じたのである。……なればこそ、無駄をいふにしても、熊谷陣屋もちだせば、寺子屋もちだしたのである……

「ねえ、一寸……およりになりませんか、わが家へ？……」

と、すなはちかれは五十吉を誘つたのである。「わが家といつたつて事務所……事務所といつたつて町會んですが……」

……麻布飯倉の、日ごろ常次郎が「小父さん、小父さん」といつてゐる人の一人息子で、いまだ三田の學校へ行つてゐる豊夫のところへ赤紙が來たと聞いて、かれは、その晩すぐに、追ッ

とり刀で淺草から馳けつけた。……といふものが、豊夫は母親のない子で、十三の年から父親の手一つに育つた不仕合な子だった。が、それにしても素直によく出来た子で、生意氣ツけがさらになく、わるく僻んだりするいやなところでもちツともないのにつね／＼かれは感心してゐた。當の親のはうだつて、永年學校の先生をして來たにしては話もわかり、一應は人のいたはりもあるのだが、何分、酒も煙草ものまず、碁も將棋も知らないといふ堅人だから、道樂ものゝ看板をかけたかれには、どこか矢つ張、氣ぶツせいなところがあつた。だから、かれにとつては、豊夫あつての「飯倉」だった。そして、豊夫に逢ふのをたのしみに、必要以上にしば／＼「飯倉」に足を向けたかれは、何かにつけて

「好きだなア、俺は、あの豊ちゃんつて子が……」

といつては、これもまた、いまは亡きかれの細君にわらはれた。

「可笑しいわよ、子だなんて、いつまでも子供のやうに。……大學生だわよ、もう、豊ちゃん……」が、強情にかれはその注意を肯かなかつた。

「いゝんだよ、それで。……俺にとつちやア子供なんだ、いつになつたつて。……おつ母さんに手をひかれて、よち／＼あるいてたあの子とちツとも違つちやアゐないんだ、いまだつて、……」

だが、不思議だよ、あの子の前にでると、おのづとこっちの料簡まであかるくなつて来るから。

……あの子のことを思つたら、がらくたのよりあひだよ、世間なんてものは……」

……いへばその最良役者の一生を賭けるときが來たのである。かれとしていかで安閑たるをえよう。一日働いて歸つて來たばかりの疲れもいとはず、かれの、すぐにまた電車に飛乗り、はるばる麻布へといそいだ所以である。

が、當人の顔を見てかれは拍子抜けがした。つねとすこしもかはらないしづけさをもつた表情を發見したからである。かれのはうがよッぽどあわて、よッぽどかみづり、よッぽど昂奮してゐた。

「旗だね、あの、武運長久と書いてもらふ……」

かれは、でも、せいゝゝ意氣込んでいつた。「心配しなくつても、明日とゞけるからね、俺がいゝのを。……いくらでも旗屋に友だちがあるから……」

……と、

「大丈夫ですよ、ちゃんともう買つてあるから……」

「買つてある？……」

「どうせ入ると思つて、いつか友だちが買つたとき一しよに買つといたんですよ。」

と、豊夫は、しづかに机の抽斗から、かねて用意の日の丸をだしてみせた。

「何んといふ……」

途端にかれは口がきけなくなつた。目の中が熱くなつた。……その無言の感激が、あくる朝、かれを坊主あたまのもちぬしにしたのである……

「……といふわけで。」

と、常次郎は、かれの話を了るとゝもに、果してかれの思つたやうに……といふよりも、それ以上、もつとしんみにそれを聞きつゞけてくれた五十吉にかれの感謝にみちた目を向けた。「何何につゞけ、とか、だれ〜につゞけ、とかいひますね、よく。……あれなんで、つまり。……豊夫につゞけ！……全くその氣もちになつたんで……」

「……………」

五十吉は無言でうなづいた。

「こゝにしかし驚いたのは床屋で、いきなり朝ツばら、坊主にしてくれとわけもいはずに飛込ん

だんですから……」

常次郎は、ことさら大きな聲でわらつた。あきらかに五十吉をさそふ水だつた。が、五十吉は應じなかつた。……ばかりでなく、逆に一層、顔の神経を硬こはばらせた。

「實際、今の若い人たちは……」

ちツとその氣もちを噛みしめるやう五十吉はいつた。

「そ、さうなんで……」

それとみるや、あわてゝすぐに常次郎は立直り、もつともらしくうなづいた。「机の抽斗から、ていねいにたゝんだそのまツさらな旗をだされたときには、おもはずこツちはハツとした……といふよりも、ギョツとしたんで、ほんとに……」

「ちやんと、もう、それだけの覺悟は……」

「いゝえ、覺悟だなんて、そんなあらたまつた、よそ行きのものちやアなくつて。……もツと、かう、身についた、ジツクリした……」

と、常次郎は、豊夫の親豐藏が、その晩あとでひそかにいつたことを、こゝぞと受賣した。と、そのとき

「相済みません、遅くなりまして……」

衝立のかげから二十一二の女事務員が茶を運んで來た。

「あい、有難う。」

と、常次郎は、土瓶ぐるみ茶碗をのせたその盆を自分のはうへうけとつて「どうもね、何分まだ新世帯で。……ちよつくらちよいと湯も沸かすことのできないしまつで。……ねえ、みつちやん？……」

と、かの女にいつた。

「えゝ、早くガスをどうにかしていたゝかないと……」

かの女はしづかにこたへた。

「さうなんだよ、君もこまるだらうがこツちもこまる。……こツちもさういふから、君からも、うるさくせツついてくれよ、町會長に……」

「えゝ。」

「ぼくよりも、君のはうが、町會長に信用があるらしいから……」

「そんなことありませんわ。」

そのまゝ、かの女は、衝立のかげに消えた。

……五十吉はみ送つて、かの女のいろの白いのも、目もとの涼しいのも生れつきなら不思議はないとしても、モンペ形の、モンペだけ脱いだあとの上衣を要領よく事務服代りに着こなした恰好のよさはたゞではないと思つた。……すくなくも町會事務所の女事務員の所作ではない、ことによると、近所のむすめでも臨時の手傳ひにつれて來たのかも知れないが、それにしたつて出來すぎてゐる。……いへば、かれは、かの女が茶をもつて出て來たときすでに、果して何ものと、常次郎の肩越しに人知れず目をみ張つたのである。

「さア、一つ。……ほんとのカラ茶で……」

常次郎は、五十吉の前に茶碗を置き、土瓶をとり上げて注いだ。

「あゝ、どうも……」

といつたものゝ、かれは、何かなほかの女が氣になつた。

が、これには理由があつた。……かれに代つて作者から打明けよう。……かれは、じつに、かの女によつて、奉天に残して來たかれの息子のいひなづけのおしづを思ひだしたのである……

樹蔭